

八〇年代に昇龍さながらの飛躍を遂げたNIESを筆頭に、東アジアはいま世界で最も経済活動の活発な地域だ。けれどもこの地域は、ひとつの「共同体」にまとまるための共通項を欠いている。一方には、経済大国・日本があるが、この国は、福沢諭吉の「脱亜入欧」以来ず

アジアのなかの日本

ヨーロッパの統合が進む。それは、政治・経済・文化にまたがる大きな動きだ。ヨーロッパ共同体（統一ドイツや、東欧諸国、あるいはソ連も加わって）は九〇年代、アメリカを上回る一大勢力として登場する。これに匹敵する動きが、東アジアに起るだろうか。

八〇年代に昇龍さながらの飛躍を遂げたNIESを筆頭に、東アジアはいま世界で最も経済活動の活発な地域だ。けれどもこの地域は、ひとつの「共同体」にまとまるための共通項を欠いている。一方には、経済大国・日本があるが、この国は、福沢諭吉の「脱亜入欧」以来ず

このギャップは、今でも埋まっていない。日本は、アジアをひとつの世界に組織するためのビジョンなど全然もっていないし、アジアの国々のほうではそんなことを望んでもいないのである。なぜ日本は、それはど他国に対する想像力を欠いているのだろうか。

日本はナイーブな社会なのだ。日本人はそれなりに柔軟で、世界各国・各民族の文化を受け入れはする。しかしそれは、自分たちに都合のいい部分のつまみ食いにする。異文化を営む民族をそのまま垣根を接した隣人に迎えるということではない。文明の発達した地域のたい



女性の力は「曖昧な日本」を突き崩す原動力となりうるか？

共同提供

特別レポート

普遍性の模索——日本は変わるか

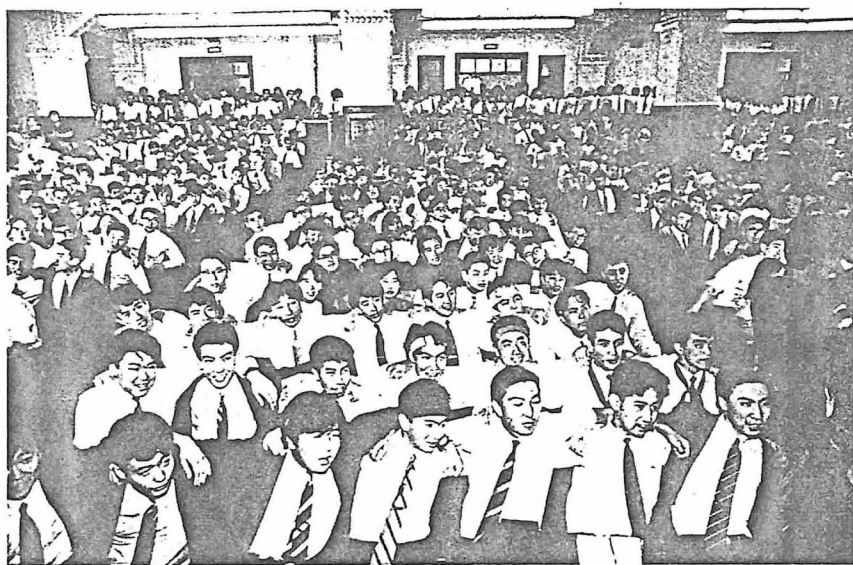
日本が自ら進んで変化する兆候は今のところない
根本的に変わるためには日本語が別のものにならなければならない

橋爪 大三郎
東京工業大学助教授

バスティーユ監獄が民衆に襲撃され、大革命が勃発してから二世紀。一九八九年はたまたのフランス革命二〇〇周年ではなかった。中国の現状を憂い民主化を求める天安門の青年たちの勇気ある闘いよりは、衛星中継を通じて刻々世界へ伝えられ、秋には東ヨーロッパに飛び火。そのあとよいよソ連を揺るがすに至っている。止めようのない歴史の地殻変動をみる思いがする。第二次世界大戦の終結（一九四五年）からは半世紀が経過した。アメリカ帝国とソビエト帝国ががっぷり四つに組んだ冷戦体制も、ベルリンの壁も、過去の遺物となりつつある。世界は新しい国際秩序を求めて、苦しい模索を始めている。

が自民党の伝統的な政治手法だった。選挙区を駆けまわって自民党代議士はそのエキスパートだ。彼らのポストとなつて永田町に君臨するころにはすっかり、外国に通用しない永田町の政治力学のとりこになっている。日本の政治システムはお世辞にも、日本の国際的な実力にふさわしいものだといえない。激動する世界をみるにつけ、国民の歯痒い思いは募る。じり貧で、出番のなかった日本社会党がこへ来て急に息を吹き返したのもその現れだ。実績や政策が評価されたのではない。とにかく政権政党がもうひとつ欲しい、という国民の声である。政権交替の可能性がないと、まともな政策論争も政治改革もできないことを直感しているのだ。

日本に与えた。こういう初期条件から出発したことを考えると、日本の急成長は十分に理解できることである。古典経済学者リカードの唱えた「比較生産費説」は国際分業を説明するモデルである。単純だがこれに照らすと、日本が今日の発展をみた理由がうなずける。いま運賃を無視できるとしよう。リカードによれば、ある商品が他の国に輸出される（輸出競争力をもつ）ために、その商品が絶対優位をもつ（生産費がほかの国に比べて安い）ことは、必要条件でも十分条件でもない。問題は、比較優位（Comparative Advantage）は国内価格でその商品が他の国より相対的に割安であることなのだ。ゆえに貿易は（相対価格差のある限り）必ず生じる。しかもそれは双方にとって有利である。



和光弘明撮影
会社訪問出陣式で氣勢をあげる学生たち（明治大学）。日本の共同体は共通の「外」をもつことで成立する。家も村も企業も

いなかった。日本人もなにかのルールを共有してはいるだろう。だが日本人は、ルールを共有している事実を確認するのを好まない。それよりも、そのつどその場のメンバーと協調するほうを好むのだ。そこで日本人は、ルールの代りに共通の「外」をもつとする。日本人の共同体は、「外」を共有することで成立する。家も、村落も、企業も、「外」が確定すれば、共同体の範囲も確定する。それらが積み重なっているのが日本だ。

これらの曖昧さを温存し、社会運営の技術と結びつけているのが日本語なのだ。この、いうなれば言語の壁を、実用的な即時翻訳機械の出現が崩壊するのを妨げる最大の障壁である。これが取

これら無数のミニ共同体の調和をはかるため、極大の「内」を与える切札が必要になる。それが天皇ではなからうか。天皇は日本人が、明示的なルールによらないで自分たちの同一性を確認する（共通の「外」をもつ）ための虚焦点のようなものだ。日本ではこうして、普遍性への志向が極小になる。そもそも「外」で通用しないことを前提にするようなものは、普遍的でありえないからだ。このようにだとすると、日本社会は自分からは変化できないので、つねに外部を意識せざるを得ない。しかも外部／内部を分ける界面は一方的である。外部のものは次々内部に持ち込まれ、内部は新しい平衡を求めて変化を続ける。しかし、内部のものが外部に持ち出されるかどうかはどうでもよい。そしてこのあり方が見直されることはこれまでなかった。日本が持つべき島国である間はこれでよかった。だが、今は違う。それなのに、日本が変ろうとしない。それが世界的な問題になっている。

早い話が、日本語が別のものになること。どんな言語でも、最低限の論理性を備えている。言語というものは、その意味を確定するのに文脈に依存する必要がある。なにがしかの曖昧さを残さざるを得ない。その曖昧さをうまく最小限に抑え込んでコントロールするところに、法律や宗教のような普遍文明の存立基盤がある。ところが、その曖昧さを温存し、社会運営の技術と結びつけているのが日本語なのだ。この、いうなれば言語の壁を、実用的な即時翻訳機械の出現が崩壊するのを妨げる最大の障壁である。これが取

- 参照項目
- 6巻 言語
 - 7巻 国際関係
 - 9巻 社会科学
 - 14巻 天皇
 - 15巻 日本人
 - 17巻 文化

・日本社会はめまぐるしく変化する。少なくともその表層は。明治維新以後、わずか一〇〇年あまりの間の変化は驚くべきものだ。では、すべてが変化するのか。そうでないならば、日本を日本たらしめている核とは何か。日本社会の同一性（アイデンティティ）とは何か——これを日本人自身がなかなか自覚できないでいる。そして日本を外から見つめる世界の目にとっても、この疑問はますます重要な関心事になりつつある。

生活の複合としての民族

民族の問題は、九〇年代に再び大きなテーマとして歴史の表舞台に浮上した。東ヨーロッパでもソ連でも、イデオロギーと体制の重石が外れたとたん、それまで抑えつけられていた民族・宗教をめぐる軋轢が一挙に噴き出している。普遍思想としてのマルクス主義（プロレタリア国際主義）が退場すると、その下から「人類の普遍性」に回収しきれなかった各地の人々が営む固有文化や特有の生活形式が顔を現わした。彼らが独自の社会を営む権利——民族自決の原理は、今でも生きている。

ある民族が国家を営んでいるところを考えると、社会は一般に、いろいろな生活のかたちを共有する人々の集まりと見なすことができる。生活のかたちをルールと、そして、そこでの人々の振舞いを言語ゲーム（あるいは単にゲームと呼ぶことにしよう。社会とは、ルールを共有する人々のゲームの複合（あるいは単にルールの複合）であるといってもよい。複雑な社会は複雑な社会なり。人々の生活のかたち（ルール）が法・宗教・経済・政治……へと分岐し、複雑に絡みあつたものとして記述できる。

われわれの営む社会の最も大きなサイズの前まわりはさしあたり民族国家である。これを、さまざまなルール（言語ゲーム）の複合として記述してみよう。すると、これらの間に次のような関係ないし秩序が認められるので

はないか。

(一)これらのルール（言語ゲーム）は、互いにおおむね無矛盾（両立可能）である。

(二)これらのルールの間には、階層性（一方のルールが他方を「前提する」という関係）がある。

例えば、イスラム教は利子を禁じているが、これと営利企業は容易に両立しない（資本主義社会は、利子を禁止するような宗教のもとでは成立しにくい。一方、「前提する」ということで言えば、資本主義は勤勉なエリート（行動パターン）を前提する。発達した法のシステムは、形式論理や書字技術を前提する、などという関係が考えられる。

さて、こうしたルール（言語ゲーム）の堆積の最も基礎になる部分（すべての振舞い、文化、制度の前提になる部分）には何がみつかるだろうか。そこには必ず言語がある。

言語は日常の振舞いや認知のあり方と密接に結びついている。言語と日常生活とは相互形成的である（どちらがニワトリともタマゴともいえない、だから言語ゲームという）。言語は無意識のうちに学ばれるうえ、その秩序の全体を自覚することもできない。世代から世代へ伝えられていく文化的伝統の中核である。そしてそのあり方は、明らかに他の民族の言語と異なっている（他の民族の生活のルールと両立不能である）。その意味で、言語はその民族の文化的同一性を支える規範の核をかたちづけているといえるだろう。

このように、社会の最も前提となる層にあって、その社会を制約しているルール（言語ゲーム）を「基礎ルール（ゲーム）」と呼ぶことにしよう。日本語、日本人の日常生活や感覚のあり方などが、日本社会の基礎ゲームである。

それに対して、より上層にあるルール（言語ゲーム）は、日常生活から距離を保って、意識的、客観的に構成されたものである。そのため、比較的容易に他の民族のものに移転することができる。例えば知識や情報、経済財、法・そのほかの社会制度など。それらは、多くの民族のもとで妥当するという意味で「普遍的」である。

例えば知識のあり方としての「仏教」を考えてみよう

う。これはもとインドに生まれ、インド社会に生きる人々の苦悩に焦点を合わせた思想だった。しかしそれが、解脱や中観といった、インドの枠に限定されない普遍的な水準を獲得したから、インド、南アジア、中央アジアや中国、さらには日本にまで拡大したのである。民族や固有文化の枠を越えて、もっと大きな共通文化圏を築くのは、こうした普遍思想・普遍宗教・普遍文化（つまり文明）なのだ。文明は、基層の固有文化を破壊するわけではないが、そこに多少の手直しを加え、多民族の共同社会をかたちづくるとうとする。

近代から現代世界を牽引してきたヨーロッパ文明も、こうした普遍性に対するきわめて鋭敏な感覚と志向に導かれてきた。その土台はキリスト教にあり、ローマ以来の法の伝統や、科学をはじめとする合理的な主知主義とも結んでいる。社会学者マックス・ウェーバーは、これらの要素が幸運な結合を遂げるところ（具体的にはピューリタニズム）に近代資本主義が生まれる条件があったとした。それらの要素に共通するのが、「言語の性能を最大限、普遍性に向けて研ぎすましていく技術」であることとを確認しよう。

さて、大規模な共同体を構築する最も明快な方法は、ルールを共有することである。イスラム教は典型的にこのやり方をとっている。ルール（コーラン）をまず定め、それにともに従う人々の共同体として人類を再組織すること。これがイスラム教の運動であった。彼らの文明は、不変の法（神の法）を共有する法共同体である。

キリスト教徒も人類の共同体を目指す。ただし、それは愛の共同体であって、法共同体ではない。彼らの法は神が与えた不変の法ではなく、人間が随意に制定する。ゆえに彼らは、各民族ごとの王国を形成した。その王権を覆して市民の法を制定することができた。立法を通じて社会を作り変えていく技術は、彼らの着想による。法は人間をコントロールする。その法を人間（社会的な含意）がコントロールすることができれば、人間は社会の主人になる。この論理は近代に不可欠である。

日本は変りうるか

こうした法思想は、およそ日本の伝統社会に根づいて